



話題の本棚

スレイマン・バシル・ディアニウ著『アフリカ哲学のために：存在・時間・言語・政治』
デヴィッド・グレーバー著『民主主義の非西洋起源について：「あいだ」の空間の民主主義』

特集／18禁

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

グレーバーが再定義した「民主主義」とは

民主主義の

非西洋起源について

「あいだ」の空間の民主主義
デヴィッド・グレーバー 著
片岡大石 訳 平凡社ライブラリー



評者の周りには、グレーバーを崇拜している人が多い。私はひそかに彼らのことをグレーバーヲタクと呼んでいる。グレーバーは二〇二〇年に亡くなった人類学者であり、多くの著書を残した。その一部は邦訳もされており、『アルシット・ジョブ』や『万物の黎明』などは日本でも大きく話題となった。かく言う評者は、どうしてもグレーバーを好きになることができなかった部類の人間である。彼の理論や提示する事例などは興味深いものの、結局何が言いたいのかわからないと感じてしまったからだ。しかし本書は、評者の指導教員から最初に勧められたグレーバーの著書であり、初めて、そして唯一ちゃんと興味を持って読めた本である。二〇二〇年に邦訳が以文社から出版されて以降、長らく絶版の状態が続いていたが、この度文庫化してまた市場に戻ってきた。

本書の一番大きな問いは、「民主主義」とは、内在的に西洋的な概念なのか？である。そして、アメリカを中心に世界各地の事例を用いて、民主主義が西洋起源であるという神話を壊していく。それぞれの事例を通じて主張していることは、民主主義は、支配秩序が及ばず、異文化が混ざり合っているような空間においても、異なる人々が暴力なしで共存するための実践が行われているという点で

ある。

そもそもグレーバーは、西洋を存在しないものであると断言する。そして、古代アテネの政治制度である「民主主義」と呼ばれるものゝ多数決による決定ではなくコンセンサスを実現するという方式は、古代アテネ以外の世界各地で、それ以前から存在していたという。これを指摘することそのものを、民主主義の非西洋化と呼ぶのである。そして、この西洋で生まれたとされている民主主義的実践＝平等志向の意思決定プロセスは、複数の文明および共同体の「あいだ」、つまり、「強制力を備えた制度構造の外部で人間生活が営まれるような場所」でも出現する「ものだ」という。そのうえで、グレーバーが主張している「民主主義」は、おおむねアナキズムと同じものである、という論を提唱する。この点においては本書では深くまで語られていないが、グレーバーがアナキストであったという前提に立つと、あらゆる場面でその匂いを迎えることができる。この点においてより深く追求したい人は、是非『アナキスト人類学のための断章』を読んでもらいたい。

前述の通り、個人的には最良のグレーバー入門書だと思っている。ただし、彼の定義した「民主主義」は、多くの共同体に当てはまるため、そもそもの定義が広すぎるという指摘があることを忘れてはならない。そのため、彼の論は妄信するのではなく、ある程度批判的な視点を持ちながら読むことをおすすめする。なんせ、グレーバーヲタクが多く生まれてしまうような魅力的な論を提唱するヒトである。引き込まれすぎないように注意すべし。

(フナチ)

(二二六頁 税込一八七〇円 4月刊)

アフリカから「**普遍**」をとらえなおすこと

アフリカ哲学のために

存在・時間・言語・政治

スレイマン・バシル・ディアニユ著

廣田郷士記

青土社



近年、日本の出版界では空前のアフリカ哲学ブームが起きている。一昨年に刊行された河野哲也『アフリカ哲学全史』を嚆矢として、カメルーン出身の哲学者アシル・ンペンベの著作が三冊翻訳された（うち二冊は綴葉でも取り上げている）。アフリカを研究している評者としては突然のブームに驚きを隠せないのが本音。しかしこのビッグウェーブには乗るしかない。そして、この世界にまた一つ新たな訳書（とその書評）が生まれた。

著者のデアニユはセネガル出身で、フランスで哲学の博士号を取得した。本文一四三ページと小柄な本書は、アフリカ哲学の入門書であると同時に、デアニユの思想書ともなっている。

本書では、テンペルスのバントウ哲学、ソビティの時間論、カガメの言語哲学……といったアフリカ哲学の主要テーマが解説されている。論じられるテーマはあくまで基本中の基本であり、正直これ自体にあまり目新しさはない。むしろ本書の魅力はそれ以上に、入門書という体裁を借りて、ディアニウの思想が率直に示されている点にあるだろう。

ディアニュの思想の核にあるのは、ズバリ「普遍」と「翻訳」である。西洋思想は往々にして、自らの言語のみが哲学をおこなうの

に最適な言語だとして、普遍を僭称してきた。しかしディアンヌにとって普遍とはそうしたものではなく、「それが翻訳される具体的な形としてのみ存在する」。過去には、西洋思想とは根本的に異なるものとしてアフリカ哲学を構築しようとした論者もいた。しかし彼らの思想を丹念に再読すると、その根本に、人間一般に共通する普遍的な洞察があることに気づく。翻訳を離れたどこかに普遍があるというより、ある文化・言語に翻訳された普遍のみがあるのだ。

ディアニの普通思想は、彼の出身地である西アフリカの国セネガルの独立史に色濃く影響されているだろう。セネガルは、独立前から国際的な黒人運動の中心地となった一方で、独立時には、初代大統領のL・S・サンゴールが、それを国民形成の道具へと転用した（中尾沙季子『パン・アフリカ主義』）。かつて普通を唱えていたサンゴールはナショナリストとなったのだ。本書全体に目立つサンゴールへの言及も偶然ではないだろう。それは、普通と特殊の間で蹉跌したサンゴールに対して、翻訳によって普通を目指そうとするディアニなりの応答の仕方なのだ、とは考え過ぎだろうか。

が、ひとつ異論も唱えてみよう。翻訳の役割を高く評価するはずのディアニュが、なぜ自言語のウォロフ語ではなく、フランス語で本書を書いたのか。ここには言語間の関係をめぐる、より厄介な問題がある。……と、つい熱が入りすぎてしまった。興味を持たれた方は、あわせて中村隆之「アフリカ哲学への招待」(『ゲンロン17』所収)を読むと、理解がより深まるはずだ。今後も日本語圏でのアフリカ哲学のますますの発展を願って、筆を擲く。

(倉井)

今月号の特集は×××。××か

ら××××××××××特集だが、ここに
××××××××××でいるのはどうなの
か！だからこそ以下では、×××の
一九二〇〜三〇年代を中心に、と
りわけ日本における××××××××
××××の×××。その奥深き場所に
××××××××××だ！××××××××溢れ
るこの時代は、××××××××××は
××××××××××を上げる、いかなる××××××××××
××××××××××のか。そこに××××××××××したもの
それは××××××××××にはかならない
し！(せ)(せ)(せ)

数年前の夏、下鴨神社で開催された古本まつりで、鮮やかな赤色をした一冊の本を手に入

入れた。書名は『カーマシヤストラ』。発行は今から約百年前の一九二七年一〇月。発行所はどういうわけか上海となっている。

「カマシャストゥ」は古代インドの性愛に関する性典だが、百年前のこの本はそこから名前を拝借したのだろう。やはりと言うべきか、目次を見ると「愛の魔術」や「明治性的珍聞史」など（やや堅苦しい）性に関する文章が多い（官能小説も掲載されている）。

編集人は「エロテック・ビビリオン・サイティ極東支部代表者」の「サー・フレデリック・ジョーンズ」（英國人）。もう意味がわからない。しかも編集後記を読むとすぐ察しがつくように、この英國人設定はごく考えても嘘っぱちで、実際にこの本を編集しているのは日本人の梅原北明なる人物なのだ。

それからだった、私がこの梅原北明という人間に興味を持つようになったのは、一世紀前のアヴァンギャルド吹き荒れる時代、未来派やダダ、シュルレアリスムが西洋から怒涛の勢いで入り込んできたその時代に、同じく奔流となって流れ出ていたエロ・グロ・ナン

センスの異様なまでのエネルギー——私はこの特集をまずそこから始めたい。

当時、人は梅原を
こう呼んだ――「昭
和初期を荒れ狂った
変態出版ゲリフ」と。



大尾傳子『地下出版のメディア史』は、その変態ゲリラの戦前の動向を中心に、非公刊の『エロ出版である軟派出版（地下出版）』の世界を描いた異色の本。ちなみに軟派出版を扱う組織は「珍書屋」と呼ばれたのだが、その総元締めが、梅原を中心として立ち上げられた「文藝市場社並びに文藝資料研究会」だった。彼が創刊した雑誌『文藝市場』が一冊だけ私の手元にある。村山知義による赤と黒を基調とした尖鋭的な装幀が目を引くが、この雑誌は当初、プロレタリア文芸雑誌として創刊された。しかし同誌はその後、梅原の個人雑誌としてエロ・グロに特化した秘密出版へと変化を遂げる。いわば「赤」から「桃」への変化であるが、案の定その変化ゆえに、『文藝市場』は発禁処分を受けることになる。

そのため梅原はもう「日本にいろのが全くいやになった。尻の小さい小役人の横行する国。まったく日本は成っちゃいない」。そこで脱出先として彼が見出したのが、魅惑のモダン都市・上海だった。そして異国の地で発禁を逃れつつ出版した雑誌こそ、『カーマシヤストラ』にほかならない。奥付にある「上海」の二字、そこには梅原の権力との格闘が刻印されていたのである。

なお『地下出版のメディア史』と併せて読みたいのが河原粹水『SMの思想史』。前者が戦前の雑誌を中心に扱ったとすれば、後者は戦後の雑誌を中心に扱っており、その主軸となるのは、サディズム、マゾヒズム、フェティシズムなど、当時精神疾患として病理化されていたセクシュアリティの持ち主が集った雑誌『奇譚クラブ』である（刑法第一七五条により同誌も弾圧を受けている）。異性愛の男女間のセックスに焦点を当てた風俗雑誌とは異なり、変態性欲だけに焦点を当てたこのマニア雑誌が、先に挙げたセクシュアリティの脱病理化に果たした役割とは――。

■違法ポルノ映画の世界

「ピンク映画」はよく聞か、ポルノフィルムはどうか。一言で言えば違法のポルノ映画。具体的に言えば無修正の性表現を特徴

とし、刑法第一七五条により上映や頒布が禁じられている映画。それがブルーフィルムであり、劇場公開を前提としない点でピンク映画から区別される。吉川孝「ブルーフィルムの哲学」はいまや伝説的な存在となったブルーフィルムを哲学的に論じようと

吉川孝の『ブルーフィルムの哲学』
度々引用されている映画研究家
吉川孝

ユリシイズ ユリシイズ 猥褻と聖典

「伊藤被告立って。」

裁判長の低い声が響いた。

「名前は。」

「伊藤整。」

（二〇世紀のイリュージョンより）

昭和二十六年五月八日午前二〇時六分に始まったこの裁判は六年間にわたって争われ、記者、伊藤整は猥褻文書販売罪により有罪判決が下り、罰金十万円を課された。世にいう「チャタレイ裁判」である。しかし現在D・H・ロレンスのこの作品は、モダニズム文学のランドマークとして扱われ、新潮文庫にも入っている。猥褻と聖典は隣り合わせだったのだ。

そして、伊藤の翻訳が猥褻文書として扱わ

したものだ。だが一番面白いのは、高知を拠点に作品を撮り続けたブルーフィルム界の伝説的な監督、通称「土佐のクロサワ」の足跡を追うパートだろう。違法ポルノ映画界の黒澤明、その正体には迫る記述はスリリングである。そして「土佐のクロサワ」のデビューと同年に伊藤整による翻訳が出版されたのが『チャタレイ夫人の恋人』なのだった。（ばや）

れたのはこれが初めてではない。昭和九年の五月三〇日、彼が訳者の一人であった『ユリシイズ』後編は発売直後に「中年女性淫欲想像描写」のかどで発禁になっている。

今では二〇世紀文学の聖典として大学でも教えられている『ユリシイズ』だが、今の地位に落ち着くまでの道のりは決してまっすぐではなかった。川口喬一による『昭和初年の「ユリシイズ」』（みすず書房）が描くのは、この「裏面史」だ。

第一書房版の発禁



の影響を受けてか、一年後に出版された岩波文庫版は猥褻と判断されかねない部分を伏せ字にして出版された。例えばこんなふうに――

《出た！ ××××！ ××！ ××××××！ もっと！ 発射！》

現代の我々からすると、伏せ字がなんともコミカルに見えてしまうのは否めないだろう（ちなみに三笠書房版でここは「みえた！ きえた！ みえた！ もっとなまで！ もっと！ 発射！」なので、伏せ字にすることでむしろ怪しげな雰囲気が増したような気がしなくもない）。伏せ字部分を空白にしたバージョンには、その空白を手書きで補充したのもあるという。現代の我々にはちょっと想像できない執念だ。

『ユリシイズ』の猥褻性が議論になったのは日本だけではない。たとえばアメリカで行われた猥褻裁判のこんなエピソードも紹介されている。猥褻か否かを判断するために法廷で該当箇所を読み上げる必要があるということになったが、未婚女性の前でこんなものを読むのは問題がある、と判事が言い出したのだ。すかさず弁護士は「しかし彼女はそれを出版した本人です」と反論（この「未婚女性」というのは『ユリシイズ』が連載されていた雑誌『リトル・レビュー』を発行していたマーガレット・C・アンダーソンその人だ）。判事は「きつとこの婦人はご自分の出版したものの意味を理解していないのです」と逃げ口上を打つ——結局該当箇所は法

廷で読み上げられたが、判事はそこで何が起きているのか理解できなかったという。にもかかわらず彼女は有罪に。そしてその号の『リトル・レビュー』は発禁になる。何が書いてあるのかわからないが、猥褻であることだけはわかるというわけだ（！）。

英語圏でもこの有様なのだから、注釈もインターネットもない時代にこの作品を理解するのは、ましてや日本語に翻訳するのは大変な苦勞だった。初の日本語訳である伊藤整らの第一書房版は相当な誤訳を含んでおり読めたものではない、と川口は指摘する。適宜原文を参照しつつ翻訳の出来を比較するくたりも、本書の読みどころの一つだ。研究の蓄積が進んだ現代の視点からすると、思わず赤面してしまうような誤訳が次々指摘される。と同時に、このような現代の視点を可能にした先人の（時には闇雲な）努力の蓄積に、素直

変態性欲の時代

大正二年、一冊の邦訳書が出版された。邦題『變態性慾心理』。十九世紀末ヨーロッパでは性的倒錯を医学的に究明する性科学が発展し、逸脱的な性行動を犯罪や道義的悪ではなく病理と捉えるようになる。その立役者の一人がドイツの精神家医クラフト・エヴィン

に感心するところでもある。

個人的には、失敗だとしても第一歩目が踏み出されたことが重要なのだ、と言ってみたくもなる。実際、伊藤らによる翻訳と評論（これにも川口はかなり手厳しい批判を加えている）をはじめとする、手探りの『ユリシイズ』移入は、同時代の日本文学に大きな波紋を呼び起こした。現代でも読み継がれる横光利一の『機械』や川端康成の『水晶』はこのような潮流なしには産まれなかった作品だろう。『失われた時を求めて』も同時代的に紹介・翻訳がなされていた。

仮に誤解の上に生まれたのだとしても、日本のモダン文学は大きな成果を挙げたのだ。そして、この時期の日本文学の革新に大きな影響を与えたものとしてもう一つ、フロイトをはじめとする心理学の移入がある。これは次節に譲ろう。（コク）

グ、主著はPsychopathia Sexualis（一八八六）——上述の書籍はその訳書である（明治二十七年には『色情狂編』という題で抄訳されていたが、発禁処分となっていた。性的逸脱の症例紹介や分類を行なったこの著書はサディズムやマゾヒズムなどの用語を日本へ持ち

込むこととなる。たとえば谷崎潤一郎『饒太郎』（大正三年）の「節」、《彼はふとした機会からクラフトエヴィングの著書を繙いたのである。（…）彼は文学者として世に立つのに、自分の性癖が少しも妨げにならないばかりか、自分はMasochismの芸術家として立つより外、此の世に生きる術のないことを悟った》。

大正後期から昭和初期にかけて猟奇的で耽美的な文学世界が繚乱した背景には、逸脱的な性や心理に対する関心の高まりがあった。竹内瑞穂・「メタモ研究会」編『変態』二十面相もうひとつの近代日本

精神史』（六花出版）

および菅野聡美『変

態』の時代』（講談社

現代新書）は、そん

な〈変態〉文化の歴

史的背景を探る良著

だ。



■〈変態心理〉と〈変態性欲〉

当時、「変態」という語は必ずしも性的なニュアンスを伴っているわけではなかった。

たとえばabnormal psychologyの訳語である〈変態心理学〉は、精神病や発達障害、催眠術、神羅りなどの逸脱的な心理作用を扱うもので、帝国大学教授の元良勇次郎や弟子の福

来友吉が講義を行うなど、正統な学問として認知されていた。ただし福来が「千里眼事件」を機にアカデミアを追放されると、変態心理学もその学術的地位を失うことになる。一方、先述のセクソロジーに由来し、逸脱的な性行動を扱ったのが〈変態性欲〉論（これには口淫など、性規範の異なる現代から見れば逸脱的とはみなされないような性行動も含まれる）。このような二大潮流のもと、「変態」という語は人口に膾炙してゆく。

二重人格や催眠などを扱った雑誌『変態心理』を刊行していた中村古狹は、大正十一年、田中香涯を執筆者に据え『変態性欲』という雑誌を創刊する。その目的は「性に関する諸問題を研鑽検討し、人生界における謎と神秘とを幾分なりとても解釈闡明」することであり、性欲一般、生殖器、性病、性犯罪、性風俗など、性に関する諸問題を医学的・歴史的に考証するものであった。『変態心理』が存在していたにもかかわらずあえて『変態性欲』を創刊した理由として、菅野は①変態心理と変態性欲を弁別するため、②当局からの弾圧を『変態心理』に波及させないようにするため、という二点を指摘している。性の探求は、検閲との闘いを伴うものだった。

■〈変態〉の弾圧

実際、性への関心がかつてなく高まっていたこの時代、数々の記事が弾圧の憂き目にあっている。たとえば南方熊楠の「屍愛について（二）」（『変態心理』大正十一年六月）は四十か所余りが削除。「手淫」「陰部暴露症」「獣姦」などを扱った田中香涯の「猥雑行為に関する研究」（『変態心理』大正九年～大正十年）は連載差し止め。先述の『変態性欲』も伏字、削除、切り抜きが常態化し、打ち切りとなる。このように検閲の対象は、ポルノ的消費を目的とした猥雑書籍ばかりではなく、変態性欲に関するもの全般に及んだ。そして「変態」の弾圧は昭和に入るとさらに激しさを増していくようになる。江戸川乱歩もまた出歯亀事件など実際の事件を紹介した『変態殺人篇』（昭和五年）が夥しい切除や伏字の挙句に発禁処分となっていた。

性をめぐる書物の歴史は、権力の介入の歴史である。そればかりではない。多様な性行動を、ときに犯罪と、ときに病理と結びつけて排除してきた歴史的言説が、いかに巧妙かつ残酷に特定の人びとを抑圧してきたか。それを今日の我々は身に染みて知っているはずだ。だからといって公共空間で実践行為に励むのは流石によろしくないが、それはさて、性に関する語を抑えつけることの暴力性は、問い続けていかねばなるまい。

（猫足）

新刊コーナー

水

— 本の小説 —

北村薫著
新潮文庫

本書を読んで、エッセイだと思う人も多いかもしれない。

しかし、副題に「本

の小説」とあるように、実は本と人との出会いを描いた「私小説」なのだ。著者は「日常の謎」というジャンルを切り拓いたミステリー作家。五十年前に読んだはずの短篇探しなど謎解き仕立ての部分もある、思わぬ本と本が結びつけられる部分もあり、飽きさせない。例えば、夏を起点にクーラーや虫の話というように連想によって、あるいは編集者や訳者のように人物のつながりによって。

「私小説」というテーマは最終章「水」で明確になる。庶民の姿を客観的に描いた私小説作家である徳田秋聲に始まり、庄野潤三、福原麟太郎、室生犀星のエピソードが並ぶ。最後は秋聲が郷里金沢の風俗を描いた文章に対し、犀星が《氏の文章らしい素気ない味がたつぷり含まれている》と語る。一人の経験

を元に書かれるのが私小説だが、我々はそこに各人の生い立ちの違いと、それでも共通する人の心を見ることができ、だからこそ感動する。著者もまた、本を読むという日常的ではあるが時にしみじみと人生の妙を味わわせる経験を、小説という形にまとめているのだ。北村薫は本への愛をつづる。それは同時にその背景にある読者も含めた人間への愛を表すものでもあり、一読では見過ごす文章の微妙な作家の人生の痕跡を拾い上げる。既に読んだ作品も、まだ見ぬ作品も、著者の文章を通して新たな光を帯びる。（投稿・波見戸）

（三八四頁 税込七八一円 3月刊）

名前のないカフェ

ローベルト・ゼーターラー著

浅井晶子訳

新潮クレスト・ブックス

「ウィーンを舞台

にした心洗われる物

語」とは本書の帯の

言である。こう言っ

てしまうと、何だかはのぼのした物語に聞こえるが、果たしてそうだろうか。

身寄りがなく孤児院で育ったジーモンは、

かねてからの念願であったカフェを開くこと



ができた。ウィーンの市場の片隅にある、小さなカフェ。本書に描かれるのは店主のジーモンと、カフェの常連客たちの十年間だ。

僕は読後真っ先に、ここには人生が描かれている！と感じた。何だか陳腐に聞こえるかもしれない。しかし、ここにあるのはまさに僕たちの等身大の人生だ。夢が叶う、恋がうまくいく、子供ができる、こうした喜ばしい出来事が生きていると起る。かたやその分だけ、いやそれ以上に人生においてありふれているのは、病气、介護、事故、借金、親しい人間の死、そして「どんな夢も現実になるやいなや消えるのだ」という単純な事実。

著者は登場人物たちの味わう不幸を淡々とした筆致で描く——誰かの幸も不幸も関係なく世の中は進んでいき、時間も流れていくのと同じように、淡々と。だからこそ、人生に起こり得る出来事を、距離をとって見つめることができる。実際のところ、僕のような普通の人間の人生というのはもちろん順風満帆なわけでもないし、でも絶望的なほど悲惨なわけでもないのだ。

どうしようもない不幸もふんだんに描いた本書は「心洗われる物語」かどうか分からない。でも、不幸に遭っても何とか生きていく人々の姿に、僕は確かに励まされる。（荒砥）

（二二四頁 税込二二五五円 2月刊）

文学は割に合う！

アントワヌ・コンパニオン著

本田貴久訳

作品社



「文学は割に合う」。原題は『La littérature ça paye!』なので、「文学はペイする」ということだろうか。文学研究が「何の役に立つんですか?」と聞かれても口をモゴモゴすることしかできない評者は、答えを求めて本書を手にとった。

本書は近年の(主にフランスをめぐる)文学を取り巻く状況を論じたエッセイ集である。文学というものがその価値を弁明しないといけないのはどの国でも同じらしい。フランス文学の研究者である著者はボードレールやブルースト、ヴァレリーらフランスの著述家の言葉を引くつ、文学が何に「ペイする」のかを語ってくれる……と思っていたのだが、必ずしも著者の立ち位置は明確ではない。

もちろん著者は文学のもたらす効用についてちゃんと語っている。例えば、いわゆる「教養」(本書では*éducation*という古いフランス語で表されている)がいかに「階級の離脱」と結びついているか、『人間喜劇』が、

いかにファイナンスに資するのか(!)。

しかし、こうした効用が冒頭のような問いに対するカウンターとしてどれほど有効かは分からない。そもそも、文学が経済的、社会的利益をもたらすことを抗弁しなければいけない時点で向こう側(誰?)の思う壺ではないか、と思わないでもない。他方で、こうした開き直るような振る舞いもいかなるものか。たとえばはっきりした答えがなくとも本書の軽やかな語り口が文学作品の読書欲を掻き立てたことは確かだ。とりあえず『失われた時を求めて』を全巻買って来よう。(荒砥)

(二四八頁 税込一九七〇円 3月刊)

近代出版研究第5号

特集 エフェメラって?

——軽薄短命の紙がみ

小林昌樹編 近代出版研究所



特集 エフェメラって? 軽薄短命の紙がみ

目次
小林昌樹 軽薄短命の紙がみ
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について
佐藤真砂 古書目録の「エフェメラ」について

私は自称古本オタク

クなのだが、オタク

歴が長くなるにつれ

て買う本がどんどん

薄っぺらくなっていく。最近よく買うのはも

はや「本」というより「紙」である。マッチ

ラベル、木版絵封筒、電車の半券、雑誌の挿

絵の切り抜き、あるいはどこかの誰かの通帳

など。どれも五〇〜一〇〇年前のもので、失

われる可能性はいくらでもあったにもかかわらず、

それでもこの世界に残り続けたものたちである。無造作に置かれた段ボール箱のなかを引っ掻き回して、これら薄くはかない紙

ぺらを漁ること、そこに無上の喜びがある。

そして本書の特集が対象としているものこそ、これら「紙もの」(「エフェメラ」)にほ

かならない。エフェメラとはあまり聞き慣れない言葉だが、簡単に言えば「軽薄短命の紙

がみ」、しかしそれでも蒐集の対象となり大切に保存されてきたものごとである。本書

にはオタクのなかのオタクたちによるエフェ

メラをめぐる論者がいくつも寄稿されている

が、やはり一番の見どころはエフェメラを専門に扱ってきた「古書目録」の店主・佐藤

真砂さんへのロングインタビューだろう。その人生は「後ろ向きに全力疾走」。過去へ過去へと疾走する佐藤さんはこう語る。

「大切なことはすべて、誰も見向きもしなかった段ボールから学びました。」「うっかりすると捨てられちゃいそうなの、まだみんなが気がついてないところをやりたいんですよ。」

エフェメラ。古本よりも一層はかない過去の痕跡。その脆さ、そのはかなさゆえに、人はそれに否応なく惹きつけられる。(はや)

(二三八頁 税込三三〇〇円 4月刊)

詩文集
夜の酒場萩原朔太郎著
中央公論新社

酒飲みというのは
基本的にどうしよう
もない存在だから、
朔太郎の酒飲み詩を
いくら読んでみたところで、別段、酒飲みに
なろうなどと思うわけでもない。とはいえ、
なるほど酒飲みには酒飲みの詩情というのがあるものだ、彼の紡ぐ酔狂な言葉を見て思
う。尤も、朔太郎のそれは月と口の影と対座
して孤影悄然と独酌するような情趣ではなく、
都会の酒場の一隅に寂然と座を占め、酔人た
ちの騒乱を横目に酒精に浸る、まさしく夜の
酒場の詩情というに相応しい。



一人にて酒をのみ居れる憐れなる
となりの男なにを思つらん

酒の話だけではない。ラジオ、映画、ダン
スなど、時代の風景を映し出した随筆の数々
が本書に収録されている。ただこの詩人、随
所にミューハー氣質の妙な高慢さと田舎者臭さ
が顔を出す。ラジオを蓄音機と間違えて恥を

かき、その首肯をとつちめる。「氣質的に欧
化主義者たる僕」と自称しながら、トーキ
ー映画では「鳥の鳴声のように囀る、紅毛男女
の意味のわからぬチンパンカンパン」を聞か
されることに難色を示す。ダンスを始めれば、
若者のダンス文化を「性慾の発散場」とコケ
ミソにして「僕のダンス哲学」とやらを大言
壮語、だが次には「もうすっかり倦きてしま
った」……その自意識と物言いは流石に苦
笑を禁じ得ない。良くも悪くも人間臭いとい
えるだろう。作家としての朔太郎が好きなら
ば、詩集だけ読んでいればよい。 (猫足)

(二五一頁 税込九九〇円 4月刊)

たびたび

さくらももこ著
新潮社

エッセイという形
式の醍醐味は、他人
がどう世界を見てい
るかという「色」眼
鏡を体験できることに
あると評者は思う。

さくらももこのエッセイといえは、爆笑必
至といった枕詞をつけて紹介されることが多
い。しかし、さもキテツな出来事の数々が

筆者を日々襲っているのかと思いきや、そう
いうことではない。むしろ、何気ない日常の
中に潜む些細な出来事に筆者が表現を与える
ことで、そこにおかしみを後付けしているとい
う言い方の方が正しいだろう。そんな愉快
な筆者の色眼鏡を体感できるのがさくらもも
こエッセイの一番の魅力である。

特に本作は筆者が自身の純粋な欲望に突き
動かされ、日本を、世界を旅するエッセイで
ある。京都で同行者が一つ五百円する清浄飲
喜団というお菓子を買った時。固い上に食べ
にくいという割の合わないから、小さくし皮
を薄くして五個で五百円にするべきだとい
う意見まで出す始末。それを聞きながら筆者は、
それだけこの菓子が皆を虜にしているのだか
ら一個五百円でももういいのだ、という結論
に辿り着く。現実を憂えるのではなく茶目っ
気たっぷりに現実を受け入れていくのがたま
らない。

みなさんは自分がどんな色眼鏡で世界を見
ているか自覚しているだろうか。自分の人生
のエッセイストになるなら世界をどう捉え直
すだろうか。もし日常を愉快に見たいなら、
まずこのエッセイを読んで、さくらももこの
色眼鏡をかけてみることを強くお勧めする。

(二八六頁 税込二八二〇円 6月刊)

どうせ死ぬなら、 最後にミーマヤム

ブリアン・クリスナ著
西野恵子訳 春秋社



アレ、三十七歳、男性。ジャカルタでオフィス勤務をする彼は、人生の孤独に絶望し自殺を決意した。最後くらい幸せにと、いつもの朝食だったミーマヤム（鶏肉麺）の屋台に向かうが、屋台はなくなっていた。最後に一杯食べてから死ぬ、その一心で死に損なったアレの人生は、ここから動き出す。

インドネシア・ジャカルタ発の小説で、人気作家ブリアン・クリスナ初となる邦訳作品。インドネシアで映画化も決定した本作は、鬱屈とした現代社会を生きる人びとの枷を解呪する「ヒーリング小説」だ。著者はあとがきでこう語る。「本書は、深刻なうつ状態を生き抜いた仲間たちのストーリーを織り交ぜて創作したものです。彼ら・彼女らは、辛い状態を乗り越える過程で見つけた、もう一度生きようと思わせてくれる小さな理由をたくさん教えてくれました。どんな精神状態でも読めるようにと、文体は平易で軽やかだ。アレは周囲からの侮辱や家族からの蔑みを

内面化し、自分には誰にも必要とされたいと思いがけなく続けた。彼を縛るこうした呪いが、思いがけない出会いのたびに一枚ずつ剥がれていく。誰にも顧みられないと思っていた自分の言葉が誰かの心に届いていた。知らず知らずのうちに感謝されていた。そんな瞬間が積み重なり、アレの世界の見え方は変わる。読んでみると、ジャカルタの路地のぬるく湿った空気に包まれ、屋台の喧騒が聞こえてくる気がした。アレに語りかける人びとの言葉はどれも、自分に言われているかのように、じんわりと体に沁み入る。（たいやき）

（二四〇頁 税込二四二〇円 1月刊）

声を上げる自由

インドの民主主義と文化と国家について

ラヴィーシュ・クマール著

倉田夏樹訳 作品社



二〇一四年、独立以降六十年以上にわたって民主主義が続いたインドでは、モディが首相になった。これ以降、「モディの賞賛と崇拜」が『どんな憲法上の罪も許される新しい道』となっている。そして、この社会を助長しているのは、メディアの腐敗である。

メディアの腐敗は、様々な手段によって実現した。例えば、二〇一九年には、事前に許可を得ていないジャーナリストは省庁に入ることができなくなった。官僚の采配次第で、政府にとって都合の良いことしか報道することができなくなったのである。現政権下で起きている社会的変化や、彼らの動きを知る術は無くなった。これに加え、インターネットの発展により、ソーシャルメディアにフェイクニュースが蔓延した。これに加担するのは、大手メディア。大手企業と政府が掲げる虚偽の現実を報道し続ける。

では、なぜ政府や彼らが最重要視するヒンドゥー至上主義に対して声を上げることができないのか。それは、政府に反する意見を主張する人々が、社会的ポイコット（解雇や当局・メディアによる付き纏い）やモブII自警団による超法規的処罰を受けることになるためである。抵抗を試みやジャーナリストや学者、裁判官などは暴力と法律によってねじ伏せられる。そしてその行為は、政府によって後押しされている。「虚偽という新しい国の基盤が築かれている」「民主主義国家・インドは、腐敗したメディアによって構築されているのである。」（ブラチ）

（二八〇頁 税込三五一〇円 5月刊）

民族とナショナリズム

アーネスト・ゲルナー 著

加藤節監、亀嶋庸一、西崎文子、室井俊通訳

岩波文庫

アンダーソン『想像の共同体』と並ぶ、

ナショナリズム論の
古典的名著がついに

文庫化！本書は評者が学部生の頃に読んで
衝撃を受けた一冊でもある。何が衝撃だった
か。著者ゲルナーの議論の明快さが、である。

そもそも、何がどうなればナショナリズム
が成立するのかを決めることはとても難しい。
人によって定義はまちまちだし、あれもこれ
もとナショナリズム成立の独立変数を増やし
ていくと、なんでもナショナリズムに含まれ
ることになってしまいがちだ。ナショナリス
ム関連の本を読むとこの手の煙に巻く話が多
く、幻滅することしばしばである。

ゲルナーはそこに一つの筋道をつけた。ま
ず、ナショナリズムを歴史現象と捉え、その
発生を前産業社会から産業社会への移行期に
特定する。産業時代には社会が流動化する。
社会が流動化するとコミュニケーションが複
雑になる。コミュニケーションを円滑にする
には文字の読み書きが必要になる。読み書き

を二斉に大衆に教育できるほどの大規模な主
体は国家のみである。書かれた文字に基づく
標準的な文化を作ろうとする国家の圧力こそ
が、民族を生み出す。こうした直線的な論理
による、きわめて明快かつ大胆な論の運びが、
ゲルナーの強い魅力といえる。

しかし、大胆さゆえの異論も尽きないのが
名著の常。本書の受容と批判については文庫
版に新録されたフルイリーの序文に詳しいし、
あわせて中井遼『ナショナリズムとは何か』
(綴葉四月号で紹介)を読めば、ナショナリ
ズムの理解がぐっと深まる。

(四一四頁 税込一五〇七円 4月刊)

(倉井)

指示と存在

ソール・クリプキ 著

八木沢敬訳

平凡社



一九七三年、オッ
クスフォード大学で
開かれたジョン・ロ
ック講義にてクリプ

キは本書所収の全六回の講義を行った。着目
したのは存在しないものの名前。本書評では
不慣れながらも哲学の世界へ、馴染みの言語
学の視点を借りつつ踏み出してみたいと思う。

言語学的に名前(固有名詞)とは、唯一の
指示対象を持つ語であり、それ故その語単体
で対象を直接指示することができる。そして
哲学的には、何かを指示するとき、そこには
その何かが存在していることを含意するとさ
れる。故に「○○(名前)は存在しない」は
偽でなければならないという。だが私たちは
例えば「シャーロック・ホームズは存在しな
い」と言えるのではないか。ホームズはフィ
クションの人物であり、現実世界には存在し
ないのだから。ではこのような存在しないも
のの名前はいかにして可能になるだろうか。

講義から約半世紀、未だ解決しないこの問
いだが、クリプキは対処の方向性を提示した
といえる。「物語中では」というオペレータ
ーの想定またはフィクション的な人物の存在
論の導入といった方法で。すると、ホームズ
が実在しなくとも、「物語中では」ホームズ
はベイカー街に住んでいる」は真となる。こ
のように彼の議論は全体を通して実際の言語
使用が意識されており、そこには七〇年代言
語学における語用論の展開との呼応を感じ
る。「やる」と言ったことは、やらないことにし
ました」と、目の前で講義が展開するかのよ
うな臨場感を持つ本書。だが何度でも前の講
義に立ち戻る自由が書籍にはある。(ひるね)

(二〇四頁 税込二二〇〇円 4月刊)

本を読めなくなつた人たち

コスパとテキストメディアをめぐる現在形

稲田豊史著 中公新書フクレ

なんとも居心地の悪いタイトルの本書は、若年層への聞き取りやネット記事を駆使して、いかに現代のわれわれが本を読めなくなつたかを詳らかにするものである。

ミソなのは本が読めないことだ。若者の文字を読む機会が減つたわけではなく、彼らはかつてないほど日々大量の文字を読んでいる。現代の情報環境が変えたのはむしろ読書との向き合い方だと著者は言う。瞬発的なコミュニケーションセッション機会の増大、ＡＩやユーチューバーなど、我々の代わりに読んで解説してくれる人・物の台頭、そしてこれらを画面上に展開するスマホの浸透。このため「日本の非読書社会化は、着実に進行している」。いずれ本々長文を読む能力は選ばれし者たちの嗜みとなるだろう、とすら著者は予言する。

しかし評者としては、そもそも人が本を読めていたためがあったらどうかという疑問もよぎる。完全な読書など不可能なのではないか——永田希『積読こそが完全な読書術である』はそんなことに気づかせてくれる好著。ぜひ本書とあわせて読みたい。（倉井）

（二九六頁 税込二二二〇円 2月刊）

世界の英語

5大陸に広がる多様なEnglishes

寺澤盾著 中公新書

ある島国で話されていたにすぎない一つの言語——英語は、今や地球のあちろちろで話されるようになり、共通語としての地位も獲得した。加えて、世界中に拡散した英語は、それぞれの地域で独自の発展を遂げている。そんな現在の英語はときにWorld Englishesと呼ばれる。約一五〇〇年の歴史を経て、英語は複数形で表される時代となったのだ。

外国語として英語と付き合う我々は、異なる言語を話す人々の交差点となるような「標準」「英語に馴染みがある。だが実際、その標準（英・米の標準変種）」が、世界で話されている英語全体の中で占める割合は小さい。大半を占めるのは世界各地の多種多様な英語だ。

これらの英語は各地域に定着した経緯も、その地で使用されていた言語の影響も、そして現在に至る変化も異なる。本書はそれぞれの歴史と言語変化の結果を綴る。そして、英語は共通語としての収束が期待される一方で、各地で分岐しそれぞれが新しい英語として変容の最中にあると述べる。ラテン語が辿った道をいずれ英語も進むのかも、と。（ひるね）

（三二二頁 税込二二二〇円 3月刊）

世界政治1

——民主化と権威主義化

岩崎正洋／松尾秀哉編 ちくま新書

民主主義は大きく揺れている。トランプやプーチンといった強権的な指導者は支持される一方で、ネパールやケニアでは2世代が政治に反旗を翻す。複雑化する世界を読み解くための「世界政治 シリーズ」がはじまった。

本シリーズは国家間の関係を扱う国際政治学と異なり、一つのテーマのもとで国内政治を詳細に描く。第1巻のテーマは「民主主義の後退と権威主義の台頭」という、今の世界を席巻する現象だ。米露中からインドネシアやベネズエラ、南アフリカまで、十の章と六のコラムで様々な事例を並べることで、各国の立ち位置や固有の問題が明確になる。

民主主義と権威主義は二項対立ではない。選挙制度を維持しながら反対勢力を締め付け、民主的な語彙を使って権力を集中させる——今日の権威主義はその巧妙な欺瞞の構造ゆえに厄介だ。しかし同時に、各国では野党や市民運動による抵抗の形態も変化してきた。

比較することで見えてくるのは絶望ではなく、抵抗の多様な形だ。混迷を極める世界を見通す視座が得られる一冊。（たいやき）

（二七二頁 税込二〇五六円 4月刊）

「工芸」の来し方、行く末

東山五条の一角に歩を進めると、河井寛次郎記念館が見えてくる。柳宗悦とともに民藝活動の中核を担った陶工・河井は、近代化のうねりのなかで日本の美を見つめ直し、新たな陶芸のかたちを開拓することにその生涯を費やした——《至る処に手仕事が生きている日本》。伝統の上に組立てられた環境、環境の上に営まれる暮らし、暮らしの上に支えられている身体、身体の中から立ち上がる人々の思い《『火の誓い』》。器の手触りのなかには幾重もの時間の層が堆積していることを、河井の言葉は教えてくれる。

◆「工芸」が生まれた日

さて、私たちは「工芸」を伝統的なものだとみなしがちであるが、意外にも「工芸」というジャンルは近代の産物であった。北澤憲昭の『増補改訂 境界の美術史「美術」形成史ノート』(ちくま学芸文庫)は、明治期の美術概念がいかにして規定されていったのかを描き出した著作である。そもそも「美術」なる語の翻訳と定着それ自体が、欧米列強に遜色ない近代国家を樹立せんとする明治政府の意向の発露であった。



美術学校制度の設立、博覧会の開催を通して、絵画・彫刻などの視覚芸術＝「美術」という稜線が成立していくこととなる——それは「日本画」という国粹的な分類を形成する根拠となり、陶芸や織物、漆器といった非「美術」的な作品群を「工芸」として切り分ける過程と一体であった。「工芸」の出自には、近代日本のナショナリズム揺籃期の欲望が暗に織り込まれていたと言ってもよい。

こうした経緯により誕生した「工芸」は、次第に「日本的な」文化の正嫡と目されていくことになった。戦前には西洋や中華圏からの文化的な独立を象徴する装置として、戦後には敗戦を経て空白化した国家としてのアイデンティティの模索のなかで、現代に連なる「伝統工芸」のイメージが形成されていく(木田拓也『工芸とナショナリズムの近代「日本的なもの」の創出』)。河井が手仕事に見出した意味は、大きな物語の筋書きの上ではあまりにか細い。

◆「工芸」の現在地

そして現代の私たちはあまりに都合よく、もはやナショナリズムという図式だけでも捉えきれないほどに「伝統」を消費しているようである。よりインスタントに、より融通無碍に。博物館のガラスケースは生きた時間を凍らせる——固有の記憶や生活の文脈から綺麗に脱色された舞台に嬌々としてカメラを向ける私たちは、お手軽なノスタルジアで腹を満たす以上の感度を保っているだろうか？それでも、器は過去から現在に呼びかけることをやめない。河井は土と火との対話を重ねた果てに、祈りのような答えに到達する。

美はすべての人を愛している

美はすべての人に愛されたがっている

美はすべての人のものになったがっている(『火の誓い』)

無私なる制作に宿る美——それは本当に脆いものだけれど、多くの意味と歴史を引き連れている。凍りついた時間は、私たちの掌の中で溶け出すのを待っている。

(浅煎り)

アメリカから見た日本／日本から見たアメリカ

味爽^{あまのけ}どきの街路に嘘みたいに降り立った華奢なヘップバーンが、ショーウィンドウの前に、紙袋からおもむろにデニッシュを取り出して……と、ここまできたらもう思い当たる人も多いかもしれない——ハリウッドの名作、『ティファニーで朝食を』。

だがこの映画を観たことがあるなら、甘いロマンスになんともそぐわない「日本人」、I・Y・ユニオシ氏なる写真家の存在も記憶しているはずだ。「丸メガネ、出っ歯、キモノ風ガウン」で片言の英語と片言の日本語を話す彼（しかも演じているのは白人）は、銀幕の夢に心置きなく浸ろうとする我々に、一瞬冷水を浴びせかける。実際、彼については現代でもアジア人蔑視と表現の自由をめぐる議論が絶えない。

このユニオシ氏の「異形」性を新たな光で照らし出すのが『スクリーンに映るまなざし：映画で学ぶ国際文化交流』の第三章「『ティファニーで朝食を』にみる日本人の異形」（後藤篤）だ。そのなかで著者はこのように問いを立てる——なぜ彼はこうならねばならなかったのか？ 原作の彼は一流写真家のようにだし、それなりにきちんと小説の世界観に馴染んでいる。彼はなぜここまで過剰なカリカチュアにされねばならなかったのか。

ヒントは、過剰なもの陰で消えてしまったものにある、と著者は推理する。戦時中を舞台にした原作と異なり、映画の舞台は一九五〇年代。東西冷戦を背景に、原作の同性愛表象は消え去り、『ティファニー』は「正常」な映画になった。そしてあの悪名高い「日本人」ユニオシ氏は、この空白を埋めるように現れる。一見無邪気なロマンスは、その実歴史と政治のインターセクションなのだ。

だがまあ、美味しいところは読んで確かめてもらうことにして、最後に飛ばす。そこで触れられるのは原作者カポーティの日本滞在記、『お山の大將』だ。日米間のロマンスを描く映画『サヨナラ』を撮影中のマローン・ブランドにインタビューをするため京都を訪れている彼は、深夜、もう一つの日米間ロマンス映画、『八月十五夜の茶屋』の看板になった、巨大なマローン・ブランドに出くわす。ここにふたたび日米関係、映画産業が交差する地点を見届けて、論は幕を閉じる。

しかし、このエピソードには余談がある。日本人写真家についての章が京都で締めくくられるとき、そこには偶然にも、もう一人の日本人写真家、森山大道の姿が浮かび上がるのだ。中学生の時、と彼はあるインタビューで語っている。「街で映画を撮ってて、見に行ったら、マローン・ブランドがいた「あれは『サヨナラ』って映画だったのか」（SWITCH）二〇一〇年五月号」。この邂逅に僕は驚きを禁じ得ない。森山大道の写真が一九五〇年代アメリカ写真のスタイルを日本において変形・発展させたものであることを考慮すると、アメリカによる日本人写真家の戯画を論じた先に、アメリカ写真のジャパナイズという鏡像が現れるということになるのだからカポーティと森山大道が雑踏の中すれ違っていたか、というのもあながち無理な想像ではなくなってくる。

しかし、二人は互いに気づかず歩き去る——僕の想像の中にもあるこの情景は、文化をめぐる奇妙な邂逅とすれ違いのアレゴリーなのかもしれない。

編集後記

周囲には映画を好きな友人が多いのですが、そのうちの一人が、小説を読むのが苦手だと言っていました。自分は反対に、小説は気楽に読めるけれども、映像作品はどうも観るために気合が必要です。なぜでしょうかね。友人曰く、小説はいつでも中断できてしまうから没入感に欠けてしまい、集中できないとのこと（裏を返せばいつでもどこでも自分のペースで進められる、ということでもあり、自分にはそこが好きです）。映像作品ってどうも情報量が多いんですよ、視覚と聴覚をフルに使わないと楽しめないんで、少し疲れます。本は紙に黒い染みがうねうねとしているだけなので、刺激に弱い人間にとっては優しいですね。アニメはたまに観るんですが、新しいものを視聴する元気がわかず、気に入った作品を何度も見返してしまいます。同じ本を何度も読むことはあまりないのに。これも情報量の多寡の問題だと思えます。

私事ですが、最近 filmmarks のアカウントを作りました。文化的な人間になりたいという欲が昔からあり、映画に明るくないことが大袈裟に言えばコンプレックスだったので、これを期にたくさん映画を観たいですね。そういうわけで、読者の皆さんのおすすめ映画、お待ちしております。(荒砥)

(荒砥)

当てよう！図書カード

『チャタレイ夫人の恋人』やそれにまつわる事件でよく知られるD・H・ロレンスですが、紀行文も多く、面白いです。その中の一つ、イタリアを題材にした作品のタイトル『海と〇〇』の〇〇に入る地名はなんでしょうか？

1. サルデーニャ 2. シチリア
3. ヴェネツィア 4. トスカーナ

(荒砥)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは7月15日です。



《3月号の解答》 3月号の問題の正解は、3.の吉田神社でした。京都大学のすぐそばにある神社です。先月には葵祭も終わり、いよいよ物語が動き出す季節。新学期の慌ただしさも落ち着いてきたこのタイミングでぜひ、足を運んでみてください。図書カードの当選者は、みーむさん、いぐあらしさん、美馬駿さん、たまこさん、びっきさんの5名です。当選おめでとうございます。(ひるね)

(ひるね)

読者からひとこと

○「当てよう！ 図書カード」のために、積ん読になっていった鴨川ホルモーを読みましたー！ 我が家の積ん読消費に貢献して頂きましたー！ ありがとうございます笑。ちなみに答えは文庫版の99ページに書いてありました!! (本当に読んだという証拠) (医学部・たまこ)

——見事正解です！おめでとーございます。

本も読んでいたのだとのこと。嬉しい限りです。私も今回のクイズを機に読み返してみました。京都にしながら京都が舞台の物語を読むのは一際楽しく感じます。いつもの「四条烏丸」交差点も特別な場所に見えてきますよね。さあ、いよいよ次は祇園祭の季節！

○社会人になるに向けての一冊も特集してほしい。

（理学研究科・えび天）

「確かにあまり扱ってなかったアーマかもしれない。現編集委員内唯一の会社勤め経験者としてお答えすると、川添愛『世にもあいまいなこぼの秘密』のような言語使用に関する本はおすすすめです。誤解の余地なく端正な文書を作成するというのは案外難しく、ですがメールや社内チャット等含め、求められる場面は多々あります。特に怒りの相手への事情説明なんかでは必須……。 (ひるね)